かげろふ日記の自照性
-知性的女性の愛と苦悩-

姜 泰 國
(人文大 日語日文學科)

目 次

1. 序 論
2. 本 論
  1. 作者の生立ち
  2. 作者の生きざま
  3. 序文が示すもの
  4. 評價をめぐって
3. 結 論

1. 序 論

「かげろふ日記」の存在について觸れた最古の文獻はいうまでもなく「大鏡」であるが，その後．藤原定家の「明月記」などにもその名が見られ，平安末か鎌倉初期ころ，この作品は貴族の間にかなり親しまれていたと思われる．

作者は名もなく道綱の母とよんでいる．　道綱母は西紀937?年から996?年，約六十年間日本平安時代の京に生きた女性である．

日記の書名は上卷の結びに「あるかなきかの心地するかげろふのにきといふべし」とあるのによっている．

上中下の三卷からなれいる．成立時期は各各違っている．作者は自分自身を反省回顧し，苦苦しい思い出をかみしみているし，また女心のはかなさをまざまざと書きつけている．

この作品は當時身邊の清少納言や紫式部．考標の女，また和泉式部にと傳っていき，だんだん讀者の範圍を廣めて後輩たちの作品に大きな影響を與えている．

人生觀照の態度，自然描寫，季節的風物の點描などとともに時の經過に添って起伏する身邊の未事を主觀を通して記述する方法は，この日記の特色であってそれが後の物語ものに各所に適用されて寫實的な手法を推進することになり，ことに「和泉式部日記」や「更級日記」の手本になっている．

「かげろふ日記」は長い期間にわたる動的な手記が，後輩の執筆欲を激ましたことは當然であって，それぞれの環境と生活體驗に卽した手記を生み出す原動力となっている．

紀貫之の「土佐日記」の影響を受けた女性第一號の作者は，「身の上のみする日記」という考え方をして執筆の意慾をそそり，現實の苦惱から解脫する意味をもこめてこの作品を生み出したことは著名な歌人の作であるだけに，後進の注目するところとなり，類似の作品を導くことにもなったのである．

自敍傳的な性格を持ちながら歌を主としないで，生活體驗の主觀的敍述に重點をおく自照文學というジャンルの特質を發揮した最初の作品として重要視されている．

筆者は平安日記文學の研究に當って，大學院時代には夢多き菅原考標女の「更級日記」に目がとどまってその夢と現實のへだたりを研究した．研究しているうちに先行日記のことが氣になって心行くまで沒頭できなかった．やはり原點からやりなおすべきであると考えて，この何年間，「土佐日記」に精魂をかたむけて，ある程度，その全貌をたしかめるにいたったのである．

自然に「土佐日記」の影響をもろに受けた「かげろふ日記」に進んだのである．手始めに，作者の生いたちについて浮き彫りにし，つづいて彼女の生きざまを日記の內容を追いながら探ってみた．この章で

は從來のかたぐるしさを脱して論文でありながらも面白く一人の昔の日本女性の愛ともだえを描いてみるつもりでかかっている結果，どうなるやら若し本稿を精讀する方がおれば，その出事ばえに對しての批評は敬虔な姿勢で耳を傾けるつもりで臨んでいる．

作者が執筆する動機は上卷の冒頭の序文にあると見て"序文が示すもの"とに章をもうけて考察してゆこうと思うのである．

最後に日本の學者たちはどう評價しているかを見るつもりである．

何はともあれ．かげろふ日記は私にとって初めての作品であるので，愼重に追跡するつもりではあるが，まだまだ初學者なので不備なところが多いと思う次弟である．

2. 本　論

1. 作者の生立ち

> 陸奥守倫寧の奴しの女,....きわめたる年に哥の上手にておはしければこの殿(兼家)かよはせたまひへりけるほどのこと，哥などかきあつめて「かげろうの日記」となづけてよにひろめ給へり....[1]

と「大鏡」に出ているように，この日記の作者は藤原倫寧の娘で，藤原兼家の妻妾の一人であり，一子の道綱の母でもある．實名は未だ知られていないのである．

> 生年は不明だが，櫻井秀氏はその著で，兼家の生れたるは延長六年なりとす．されば承平初年を以て世に出でたる者と思はれ．幼時より姿容勝れ後世或は本朝三美人の一に擬する者さへありき[2]

と述べてされに「小右記」996年五月一日の條の「中納言道綱母周

1) 松村博司校注「大鏡」岩波書店 1980, P174.
2) 櫻井秀 "日記作者傳(抄)" 「平安日記」國語國文學研究史大成5. 三省堂. 1973. P136.

忌法事送七僧」を引きながら，「時に年令六十三ならんか」と沒年を推定している．これに對して久松氏は

> 何歲で沒したかわからないが，かりに兼家と關係の生じた954年に二十歲であったとすれば，935年に生まれたことになり．沒年は六十一歲となる[3]

と多少年令的にずれた見解を述べている．研究者によって多少の差はあるがだいたい六十歲前後に沒したことは間違いないと思われる．

當時の政權は藤原氏北家の基經の流れをくむものが含めていた．作者の父倫寧の家系も北家であったが，外緣部に屬していたので倫寧は幾人かの子供を持つ年になってもぱっとしなく．右兵衛佐(從五位上)などを勤めていたが作者の政略結婚がきっかけで，從五位上の身で大國である陸奧國の守に任せられた．以來，上守，丹波守，河內守など數國の守を歷任してまわっている．自然に經濟的にも惠まれ，受領階級になった．彼は905年頃に生まれ，977年に伊勢の守五四位下として七十才位で沒している．老年まで諸國を步いたので，ほとんど京に住むことがなかったようで日記にも「縣步き」の人と記され，

今は一人を賴む賴もし人は，この十餘年のほど縣步きにのみありと記すほどである．作者の父は溫厚で圓滿な人柄であったことは日記を通してうかがわれるのである．また受領として實直で忠勤な官僚であったことは「小右記」長元八月二十五の條に，陸奧守佐任中に每年遺金三千兩を弁進していたことが實賴の日記を引用して詳しく書き記されていることによりうかがわれるのである．さらに倫寧筆と傳えられる「本朝文庫」第六記載の奏狀によって學職の豊かさも知られている

彼は父として作者を恪別に寵愛していて作者の母の死に悲しむとき

---

3) 久松潛一 外 6人 「日本文學史」中古．至文堂．1986．P282
4) 上村悅子 “「かげろふ日記」 作者・成立・傳本” 「平安日記」1．有精堂．1982．P143

「親は一人やはある」と慰めてやったり作者があまりにも失望して鳴瀧にこもる時も任地からはるばるとかけつけて娘をなだめ下山を勸めたり，傷心の作者を初瀬に同行するなど良き父であることがうかがわれるのである．

彼の妻としては主殿頭(從五位下)春道の娘と從五位上源認の娘と二人が記錄に殘っている．「尊卑分脈」の記し方では作者の母は不明としているから，上記の二人どちらでもないかも知れないが，「かげろう日記」の記事から察してみると兄理能と同じ腹からであることが分るのであるというのは作者の母が亡くなったとき，兄理能の悲嘆にくれる姿や兼家が急病でたおれた時の分別のある言動をしていることから考えて恐らく二人は同腹であると學者たちは斷定している．

作者の母のことは律儀な昔氣質の人として日記にも描かれており，逝去前後の模樣は詳細に書き記されている．從っていろいろな狀況から察して作者の母は春道の娘の方になる．作者はその人の下で育っている．　そして作者が育った社會的環境は中流家庭と言えるのである．兄理能は從五位上で肥前守となっている．　その妻は清原元輔の娘で．「枕草子」の清少納言の姉に當っている．姉と思われる女性は原孝雅の妻となっている．その孝雅の弟である孝信の娘は「源氏物語」の紫式部の母である．妹の娘は「更級日記」の孝標の娘である．

このように作者の近親者には日本文學史をかざっている著名な文學者を數多く輩出している．その中でも作者はひとぎわ目立ち，またこれらの平安女流文學者たちを先んじて彼女らに大きな影響を及ぼしているのである．

作者は954年一九歲で，北家の嫡流である兼家(二十六才)と結婚してから三十九才の974年の大梅日の深夜にいたる二十一年間の生活が日記の對象となっている．それは作者の生涯でのもっとも大切な期間であったから彼女の生がこの日記に記されていると言っても大きな誤りではなかろう．

作者道綱の母(937?～996?)が生きた10世紀は日本の古代社會の變革期でもあった．律令制の矛盾の深まり，攝關專制の確立，莊園制の擴がり，公式の外交停止などを契機にして政治經濟をはじめ社會機構が

大きく變革され，同時に中國の唐風的な宮廷文化の性格もようやく變質していった．このような變革期の矛盾をもっとも敏感にそしてもろに受けるのは官人の社會であったと考えられる．

律令の規定により儒教主義による人才の登用もそれまで行われていた官人機構も攝關閨閥政治の進行によって否應なしにゆがめられ變質していった．從って學問とか文材がいくらあってもそして家柄がよくても攝關權力になんらかのつてがないと，なんの意味もないものとなっていた．

このような變革期に文人的な受領階層の娘として作者は社會的な矛盾のさ中に置かれていたことになるのである．轉回点に立つ時代ではあるが，一方から見ると文化の普及した時代ともいえるのである．これまで宮廷貴族と僧によって獨占されてきた高度な唐風文化が內部的に解體し，頹廢のきざしと見せ始めると共にゆるみ擴がり，より下層階級に水平化する方向を取っていったのである[5]．

立身出世の夢を失った學問のある下級官人たちによって幅廣く文化の傳達がなされていった．また公式の唐との文通がただれていると言っても，私的な商船往來はさかんであったので庶民的な大陸の文化も入り易くなっていた．女房や兒童，あるいはの人人の間にも新しい文化のめざめがおこっていたのである．

この時に女性のためのひら假名の創案のような劃期的な書籍も次次とでてくるようになったのである．

市民社會の間では屏風歌とか歌合などもさかんに行われ，風流の作り物や繪物語もしきりに作られるようになってきたのである．なかでも女文字の發明と和歌の復活はまさしく社會變革につながる言語變革とも言える現象のきっかけとなっているのである．

女文字と和歌の世界においてことにすぐれた才能をもっていた道綱母は，まさしくそういう時代の潮流に乘って文學の變革的な氣運を先取したものであると考えられる．作者は歌人としての名聲と美貌があった．そして貴公子である兼家に憧れる一方，純粹な愛情と倫理的な嚴格さと潔癖さもあった．

---

5) 川口久雄“かげろう日記”「日本古典文學大系」岩波書店，1981，P86

多感で激情，嫉妬，煩悶，赤裸裸に告白する人間性がある反面，文學と和歌による優雅な心情を持つという二面性を持っている．さらに自我と主體性を持った女流文學者になる特質を備えるのである．

2. 作者の生きざま

この日記が書き始められたのは作者36才の時で，40才ごろに，ぽつんと切れて終っている．

作者の父は下僚で，作者が結婚して二か月後陸奥の守に榮轉していく．一種の政略結婚で，これが作者の一生を支配するようになる．作者は類まれな美貌にめぐまれ歌才にも長けていた．話は作者の生涯を支配した一人の男についての回想から始まる．新婚後まもなく父は旅立ち．やがて一年後には子を生む．しかし夫はそのころすでに外に女を作り，家にはよりつかなくなる．その間の事情と葛藤を錦錦と記している．

本日記は上中下三卷，上卷には954年から960年の15年間，中卷には969年から971年の3年間，下卷には972年から974年の3年間の事が記されている．本文は「かしは木のおとずれ」の條で

さて,あふなかりしすきごとどものをれはそれとして[6]

と言っているように，時の右大臣藤原師輔の三男．26才で右兵衛佐の兼家から結婚を申し込まれることから始まる．

かしはぎの木高きわたりより．かくいはせむと思ふことありけり[7]

と，間地のはるかに高い右大臣家の貴公子の當時の風習にはずれた亂暴な求婚の態度にとまどいしたが，兩親や周圍の者の助言もあって二三か月の後に結婚した．二か月後10月には父倫寧が任地へ立つ．「父との離別」の條に，

6) 川口久雄 校生．"かげろふ日記" 「日本古典文學大系」 岩波書店．1981．P109
7) 前掲書 P110

> 時はいとあはれなるほどなり．人はまだ見なるといふべきほどにもあらず… いと心細く悲しきことものに似ず[8]

と記して，初めて經驗する父親との別れの悲しみを述べている．一年後955年の8月に,一子の道綱が生まれ，「懷姙のなやみ」の條終わりに，

> 八月つごもりに，とかうものしつ，そのほどのこころばへはしも，ねんごろなるやうなりけり[9]

と記しているところを見ると，心のゆとりを持っているかにうかがわれる．だがそれもつかの間であった．「町の小路なる女」の條で，

> さて九月ばかりになりて，いでになるほどに，管のあるを手まさぐりにあけてみれば，人のもとにやらんとくけり文ありあさましさに，みてけとだに知らんとおもひて[10]

とあるように，夫が女にあてた戀文を發見する．

一夫多妻は當時の風習であったから納得してしまえばそれまでだが彼女にはそれができない．男の一夫多妻主義的な考えと氣まぐれな浮氣が一人の女を生涯苦しませることになろうとは兼家本人ももちろん考えていなかった．作者である妻は他の女への手紙を手にして失望が大きかった．作者はひかえめな抗議しかできなかった．夫はそれをよいことにして「町の小路なる女」に足しげく通うのである．

夫が家をあける日が多くなるにつれ，作者の思いは，このままにしておくまい，と夫を拒否しながらしかし一方では夫を呼ばずにいられない淋しい心情に落ちていくのである．そうしたおもいつめた氣持ちから

---

8) 前掲書 P114
9) 前掲書 P116
10) 前掲書 P116

なげきつつひとりぬる夜のあくるまはいかにひさしきものと
かはしる[11]

と詠んで色變りした菊にさして夫に送ってやる．この歌は名歌とされている．女の熱い息吹きが感ぜられるからである．「町の小路なる女」は今のバーやキャバレーの水商買の女であったのだろう．

翌年956年「人離るやど」の條に

いまはこの町のこうぢにわざっといろにいでにたり[12]

とあるように夫はめったに戻ってこない．これみよがしにせっせっと小路へ通うのである．それも作者の門前を通り，わざと妻に聞けといわんばかりに咳ばらいしながら大いばりしながら通る．夫の咳は夜中にも聞えてくるのだからたまらないのである．夫を待つ若妻の欲情が火を噴き，永い秋の夜を持てあましてねむれないでいる．夫はたまには戻ってくる．その時，裏切られたくやしさのあまり理性では夫を拒むがあえば身が許してしまう．そういう自分がいやになる思いをいくたびも味わうのである．

作者は全べてがいやになり，自分と同じ目にあっている時姫ををも捨てるほどの精神状態になる．さらに姉もその夫と共に引越してしまうのである．作者は一人，ぽつんと取り殘されてさびしく日を送ることになった．「夜中のしばぶき」の條で，

かくてたえたるほど，わが家は内裏よりまいりまかづるみちにしもあれば，夜中あか月とうちしはぶきて，うちわたるも，きかじとおもへども，うちとけたるいもねられず，夜長うしてねぶるこ

となければ，さななりとみきく心ちは，なにかは似たる[13]

11) 前掲書 P117
12) 前掲書 P119
13) 前掲書 P122

と，胸がさける思いに苦しむのである．翌年957年の夏には，町の小路の女が男の子を生むのである．作者はただ，「妬たき産屋」の條で，

> ただしぬるものにもがなとおもへどこころにしかなはねば，今よりのちたけくはあらずとん，たえてみえずだにあらん[14]

とまで思いつめるのである．このように二年ばかり町の小路の女の事で苦しい日日を送るが，翌年958年ごろには夫はこの女も厭いてくる．そしてこの町の小路の子は死んでしまうのである．「孫王のおとしだね」の條で，

> 命はあらせて，わがおもふやうに，をしかへし，物をおもはせばやと思ひしを，さやうになりもていて，はては，うみののしりし子さえ，死ぬるものか…… わがおもふには，いますこしうちまさりて，なげくらんとおもふに，いまぞ胸はあきたる[15]

と殘酷なまでに，女の不運を氣味よく思っている．夫は町の小路の女と疎くなってはいたが，作者のもとへは滿足に通ってこないのである．作者は夫の心をたしかめようと思って，「二階なるふみ」の條で，

> おもへただ昔も今もわが心のどけからでやはてぬべき[16]

と長歌を詠んで送るのである．全體で123句の長歌．夫と結婚した時からここ數年間の心情を錦錦と綴っている．これに對して夫は「富士のけぶり」の條で，

> おりそめしときのもみちのさだめなくうつろふ色はさのみこそあふ秋のごとにつねらめ[17]

---

14) 前掲書 P124
15) 前掲書 P128
16) 前掲書 P129
17) 前掲書 P131

と全體89句の長歌で，作者の心情に合わせてまじめさを見せながら應答している．この二つの長歌によって互いに相手の心境をつかむことができ，さらに夫は小納言から兵部大輔に昇進している．二人は愛のよりをとりもどし作者もいくらかの心落ちついた状態になる．964年の秋の始め，作者の母親が山寺で亡くなる．「山づらの夜霧」の條で，

よる，目もあはぬままに歎きあかしつつ，山づらもみれば霧はげに麓こめたり．
京もげに誰がもとへかはいでむとすらん．いでなをここながらしなんとおもへどいくるぞ，いとつらきや

とこの時の様子が深い悲しみとして記されている．また泣く泣く歌を詠んだりもしている．

966年三月，病い疲れた夫がってきた．病んで傷ついた夫に妻が安らぎをおぼえるのは，もう夫はどこにも出かけないだろうという安心感のためで女の心であろう．「ほのかなるともしび」の條で，夫との情感に濡れた場面が生生しく描かれているように二人は愛情を深めることになる．しかしこのなまめきは永くは續かなかった．夫は病氣がいえるとまたも別の女のところに去ってしまうのである．兼家は九人の子をいろいろな女に生ませている．

ある日，　作者は兼家と一緒になって何年になるのかと數えてみた．12年になる．この12年間，夫と過ごしたのは一體何日位だったのかと自分の身にふりかえり，夫にかまわれなかった妻の怒りを爆發させるのである．訪ねて來た夫を追い返してしまう．夫はもう二度とここは通うまいと言い捨ててささっと歸ってしまった．作者は一人淋しさにやり切れなくなって炎天下に稲荷や賀茂神社に詣でる．愛の渇きがもたらした衝動的な行動である．そしてわずかに旅先での風景が作者の炎を鎭めてくれるのである．

967年5月，村上天皇が亡くなり，夫は冷泉新帝の藏人頭に昇進した．しかし作者の愛の渇きはいやしようがなかった．當時は男が女の家に

18）前掲書 P142

通う習慣だったので，作者には妹がおり，その妹のもとに通ってくる戀人の足音を聞くと，自分の身をふりかえり，炎が新しく噴き上げてくる．そしてたまたま夫が訪ねてきても，怒りに身を振るわせて夫に背を向けて夜を明かし，そして夫が去るやいなや心の中では夫を呼びつつあえぐのである．

9月には初瀬詣でを思い立つのである．作者としては最初の遠出であったらしく．途中の見聞は，簡潔ながらしみじみとした筆はこびになっている．歸途には夫に迎えられ，にぎやかな一時を過ごすくだりも認象的である．上卷は年末の行事を略述して終っている．終わりの「御契のいそぎ」の條で，

> かく，　とし月はつもれど思ふやうにもあらぬ身をしなげけば，こえあらたまるも，よるぼしからず．猶ものはかなきをおもへばあるかなきかの心ちする．かげろふのにきといふべし[19]

と，　冒頭の「身の上なる日記」の序文に對應してしめくくっている．まことに假名文の優れた筆力をふんだんにふるっている．

中卷は968年頭から始められている．妹が詠んだ「天地を袋にぬひて」という壽歌に合わせて「三十日三十夜は我がもとに」と口ずさんで，そのまま書いて夫のもとに送ってやる．　夫も明るい歌で返してきた．しかしその翌日は作者と時姫の下衆どうしの衝突事件が起ってしまう

結局，作者は時姫のことを考えて，一歩退って少し離れたところへ移って住んだ．夫は作者のこうした行動に申し分けなさそうに，機嫌をとるようにきらきらしくせっせっと毎日通ってきた．五月の末から一か月ほど，作者は重病に苦しみ，遺書まで書いて死を覺悟するのだが，六月末ごろにすこし回復するにいたったのである．

翌年970年春，夫の新邸が出來上ったが，作者を移り住ませることはしなかったのである．作者は失望のうちにも，時姫との氣まずさを避けるためと思ってあきらめるのである．四月からは夫の訪れが間遠に

---

19) 前掲書 P170
20) 前掲書 P172

なり，「松にかかる露」の條で，

> 夜は世界の車のこえに胸うちつぶれつつときどきはねいりて，明けにけるはと思ふにぞ，ましてあさましき[21]

と作者は全身でもがき喋いている様子を記している．夫はさらにうとくなって，「訪れ絶ゆ」の條で，

> かくてかぞふれば，夜みることは三十よ日書みることは四十よ日になりけり……まだいとかかるめはみざりつれば[22]

というなりさまで，作者の心はまたも亂れてくるのである．そして心を落ちつかせるために，六月の末に，唐崎へ　えに出かけるのである．七月には石山寺の季籠を思いたつのである．そして「石山詣で」の條で，

> 心ひとつに思ひたちて，あけぬらんとおもふほどに，いではしりて，かも川のほどばかりなどにぞいかでききあへつらん．をいて物したる人もあり．ありあけの月はいとあかけれど…ともかくも思ひわかれず，ただなみだぞこぼるる[23]

と徒歩で狂氣のように走り出したようすをあらあらと書き記している．この石山での記事は，内省を支えての自然描寫が特にすぐれている．972年の正月は，「車の前渡り」の條で，

> さて年ごろ，思へば，などにかあらん．一日の日は，みえずしてやむよなかりき……急ぐにこそはと思ひかへしつれどよるもさてやみぬ[24]

---

21) 前掲書 P189
22) 前掲書 P190
23) 前掲書 P200
24) 前掲書 P210

とあって，この年は正月一日から腹立たしいことが續き，四月はじめから長精進に入り，次いで六月には鳴瀧にこもってしまうのである．女の業の果てにたどりつく一つの體驗をする．精神的に限界狀況に追いつめられ，鳴瀧にこもって，女の業に堪えるなにかを見つけだろうとする．このとき作者は自然を媒體として男女の愛慾を超えた一つの世界を見つけ出すのである．

物おもひのふかさくらべにきてみれば夏のしげりもものならなくに[25]

と夏草の茂りの深い山路をきて，物思う心の惱みの深さと比べて見ると夏草のしげりなどに數にも入らないと詠んでいる．續いて，

身ひとつのかくなるたきを尋ぬれば,さらにかくらぬ水もすみけり[26]

と，わが身の成行きを尋れば，鳴瀧川の水が流れて本へかえらぬように京へ歸らず，ここに住みつけとも言うように水が澄んでいると自然を目の前にして諦觀の境地に達している．夫の度重なる「前渡り」になやまされて山に逃げ，自然から諦觀のようなものまでとらえるようになったが，夫やその家來たちなどのすすめにも應じないで20余日ばかりねばっていた．最后に父倫寧の穩やかな態度と夫の强引さにまけて，山を下るのである．

この日記の面白さは，作者が鳴瀧から歸ってきた中卷で終るのである．作者は三十六才になり，息子の道綱も青年に成長している．夫から遠のかれた作者は京の町はずれの中川でひっそり餘生を送り始める

當時の女の四十才はもう老年に入っていたらしい．この年の後半はおだやかに過ぎて，

---

25) 前掲書 P234
26) 前掲書 P234

歳のをはりにはなにごとにつけてもおもひのこざりけんかし[27]

と中巻を結んでいる．下巻は972年から三年間の記事である．時に，夫は四十四才，作者三十六才，道綱十八才になっている．このときから次第に回想でなくなるのである．記錄的なもので綴っている．年末のものさびしい中で，　新年の準備をしながら永い年月を回想した時，夜もふけてついなの間をたたく音の近づくのに耳をかたむけているところで，最后の「はだら雪」の條で，

京のはてなれば，夜いたうふけてぞたたきくるとぞ．本に[28]

と詠んで長い日記を結んでいる．中川で餘生を送り始めた女にとって，すでに日記をつける意味がなくなったのであろう．一夫多妻という社會的な悪い條件の下での妻としての苦惱に滿ちた生活を「はかなき身の上」とみづから定め，　その激しい感情の浮沈みを上中の兩卷におさめている．當時の一人の妻として傷つきやすく，人生の戰場で敗れ果てた武士の如く，物靜かな悲しい諦觀が下卷の世界でみせている．

不安と嫉妬と愛憎に身を燃やした女，しまいには妻の座を捨て，母としての生活に安住せざるを得ない平安時代の一受領の娘の姿は悽絶にまでうつてくるのである．

この日記を貫いているのは女の情念の確さである．理性に對する感性文學である．女の本能をざまざまと見せつけられるような文體でこれだけに女の强さ，柔かさ，哀れさが行間に　あふれている．

行間に流れている情念のみずみずしさは，類がないと見ていいだろう．ふりかえてみれば「鳴瀧の水」以來，この作者は萎れている．鳴瀧川での自然觀照のたしかさは，この作者が愛慾の世界を超えた證しとしてあげることができよう．作者がこの日記を書き始めたのは，女の生命が枯れ始めた三十六才ころであった．

三十六才と言ったら女のさかりを極めるころである．燃え盡きた女になる．作者は初めから終りまで一人の男を呼びつづけ女の執念と煩

27) 前掲書 P253
28) 前掲書 P327

惱をさらけ出している．傷つきながらも求めている．女の情感が抑制した文體の行間にあふれているのである．どこまでも古典的な均衡が感ぜられる．女の激情と生命感が均衡を保って生きのびている自照文學の作品でこの日記を超えるものは出ていないとも評價されている．
立原正秋は「愛をめぐる人生論」で，

> 「かげろう日記」の作者である道綱の母なども痛んでしおれていた女だろう[29]

と言いながらさらに次の述べている．男に裏切られて苦しみながらなお男を求めてやまず，かげろうのような不安な存在のなかから女の眞實をうたいあげた点が立派で，しおれてきた作者から病み拔けてきた女のすがすがしい新鮮さが感ぜられる．女の業と自ら鬪い，それを乘り超えて，中川で餘生を送りながらやがて自照の中に風化して行くしおれである．これも一つの淨化方法として高尙であると見解を述べている．
室生犀星はかげろうの日記遺文という小說を書いている．その "あとがきで"

> 原典かげろうの日記にある町の小路の女出現ではわずか數行しか記述されていない[30]

と言いながらさらに兼家が本邸の時姬，また道綱母のような才色兼備の世界から，二年間も町の小路の女のもとに通うていた事はそこにまれに見るその女の美しさを見つけたからである．恐らく氣高いとかおごりとか學や慧智のかがやきの間に失われているもので，人間にじかに要るものが無邪氣に用意されていて兼家の眼はおどろきとよろこびでそれらを迎え入れていたからであろうと述べている．
田邊聖子は「魅惑の男」として

---

29) 立原正秋．「愛をめぐる人生論」 新潮文庫．1992．P61
30) 室生犀居 「かげろうの日記遺文」講談社 1992．P210

> 夫を憎みながらも愛し，愛しつつ憎みそのくせ，かげろうは夫を戀していた[31]

と言いながら妻に戀されるほど兼家は魅力的な男でしたと言っている．

土佐日記は作るという文學的な意識の下に書かれており，また散文表記の實驗として試みられた作品だった．作者の妹の娘が書いた更級日記は少女の日の感傷と夢を優しく追想している作品である．和泉式部日記は愛慾のはなやかさと女の哀れをうたっている．ところで「かげろう日記」の格調の高さ，密度の深さがわかってくるが，それほどこの作品は内面的な心情を記した强烈な散文精神に貫かれている．土佐日記の散文精神を受けつぎながら，なお土佐日記を超えるこの作品はどのように生まれたのだろうか．それは作者の自照精神のたしかさのためであろうと考えられるのである．

3. 序文が示すもの．

「かげろう日記」を時時讀み下しながら常に私の胸の底に殘っている疑問は道綱母はどうして日記を書かねばならなかったかであった．そこで，本稿は手始めにこの素朴な疑問から出發することにしたと序論で明かしている．そして段段深みに入っていくといくらかつかめることが出事た．「かげろう日記」の冒頭の一節，序文である「身の上なる日記」の條に，

> かくありしときすぎて，世中にいとものはかくともにかくにもつかで，よにふる人ありけり．かたちとても人にもにず，こころたましひもあるにもあらで，かうものの要にもあらであるもことはりとおもひつつ，ただふしおきあかしくらすままに，世中におほかたふるものがたりのはしなどをみれば，世におほかるそらごとだにあり．人にもあらぬ身の上までかき日記して，めづらきさまにもありなん．天下の人のあたかきやと，とはんためしにもせ

31) 田邊聖子「文庫日記」新潮文庫 1993. P113

よかしとおぼゆるも，すぎにしとしつきごろのこともおぼつかなかりければ，さてもありぬべきことなん．おほかりける[32]

とあり．口譯すれば，このよにはかなく生きてきた過去半生も過ぎてしまってまことに頼りなくどっちつかずのありさまで世の中に暮している女があった．容貌といっても人竝みでもなし，思慮分別もあるわけでなし，こんな役立たずの狀態でいるのも無理はないと思いながら，ただなんとなく毎日を過ごすつれづれのままに世間に流布している古物語の端端をのぞいてみるとありきたりの勝手は作り事でさえもてはやされているようだから，人竝みでもない身の上まで日記として書いてみたらなおのこと珍しく思われることであろう．この上ない高い身分の人に嫁いだ女の生活はどんなものなのかと尋ねる人がいたらその答えの一例にでもしてほしいと思われるのだが，過ぎ去った年ごろのこと幾月も前のことは記憶が薄れてはっきりしないので，ともかくこのくらいでまあよかろうという程度の記述が多くなってしまった[33]と執筆の動機を觸れながら作品形成の方法の核が語られている．

この序文はかげろうう日記を理解するためにきわめて重要な文章である．「ただふしをきあかしくらすままに」までの前半は作者の苦惱に滿ちた半生を顧み，わが身がいかにとりとめなくはかない存在に過ぎなかったかを悲しく自覺した，その痛切な自己認識を示すくだりである．それは彼女の人生の總體的，本質的な意義を述べているのであって過去と比べて現在のみじめさを表わしているのではないのである

頭序の「かくもありし時過ぎて」から察してみればわかるように，つまり若いころには滿たされた結婚生活もあり，幸福への期待もあったのにそうした時代の過ぎてしまった今はその充足感も希望も失われたしまったと解釋されるのだが決してそうはとれないのである．さまざまな出來事を通して結婚の幸わせのもろさ．女の愛の悲しさを味わいつくしたこれまでの生活を，現在の感懷そのものに同時に內包され

32) 川口久雄 校注：前揭書. P109
33) 木村正中 "かげろふ日記" 「日本古典」7. 尙學圖店. 1980. P31.

る過去として全體的そして詠嘆的に表出していると見てよいのである.

「かたちとても人にも似ず」と作者は自分の容貌について書いている. とくに「心魂もあるにもあらで」と文句をなしている. 外見と内容の両面から自分が無意味な存在であるかを述べている点に注意するところでもある. したがって, その實人生が無用なものでしかないことを身にしみて思う氣持ちを「かうものの要にもあらであるもことわり」と痛感させられたに違いない. あわれな氣持ちへとつながるのである.

作者はみずから空しい人生をこのように直視し, そのためにその人生を日記の世界に轉化させることに生きてきた積極的な意義を見出そうとした. またはかない身の上の眞實を明確に深く自己認識しているのである. こうした作者の身の上の自覺と作品の創造との表裏一體の關係はかげろう日記の本質ともいえるものであり, 形成の本意が集約された形で序文は書かれていると考えられる.

作者は自分自身を「人ありけり」と介している. 日記を讀んでいくと, この「人」は單なる三人稱ではなく「はかなき身の上」の自己認識と, そのことの告白であり, 作品創造とによって生み出された人物呼稱であることが理解される.

夫との不安定な關係に苦惱する妻は, ただ待つ女, 耐える女としてのみ生きることができない. その生ききれぬ苦惱が日記執筆に向かわせたものであろうが, 作中世界に自身を歩ませることによって, さらにはかなき「世の中」の認識を深めてゆくことになったと思われる.

小町氏は

> 半生を顧みた自己認識は「ものはかなき身の上」である, それを書き記したものが「あるかなかきの心地するかげろふの日記」であった[34]

と言いながら幸わせな妻のにつくことができなかったがために眞實の人生の記錄で示していると述べている. さらにこの日記を受けて紫

34) 小町谷照彦 "かげろう日記" 「國文學 解釋と鑑賞」7月號. 至文堂. 1986. P65

式部は虛構の世界の中で人間存在の現實に迫る方法を開拓したし，考標女は更級日記を執筆して，文學，信仰，出仕，結婚のいずれも徹底できず無殘な老年を迎えたわが身を索然と顧みている．かげろふ日記は女性が省察する文學の方法に先をつけたものであったと評價している

若き日の作者は物語を愛讀していたらしい荒唐無稽で，甘美な「古物語」によって築き上げられていた人生認識は兼家との結婚生活という現實の中で崩壞する．しかし，その物語の享受が實はむなしい體驗で終っているのではなく，作者の一つの素として存在し，むしろ日記の執筆に向わせる上で有效に作用したと言えよう．

上卷には基本的にはそうした「古物語」の私家集的な素材から形成して跡を探ることができる．　和歌を中心とした話が連續するために，一見私家集を思わせる形態になっている．しかしながら私家集の形態に接近しつつ嚴しい自己認識とそれを執拗なまでに散文につづろうとする意圖とによって新しいかな散文の作品樣式が生まれることになった．

歌物語的，私家集的な要素を保ちながらも，それを超えて女がたしかに生きた證を表現する道を拓いていったかな散文の道すじをうかがわせるものである．したがって序文はかげろう日記の作品構造を暗示し，また新たらしい文學樣式である女流日記文學の誕生を告げるものでもあった．小谷野氏は

> 一個の人間が現實に自己を覆う條件ないしは狀況を個人の實存として內部にみしく心，もしくは思惟構造への言ではなく，そこに停立する自己に對して理性的に覺醒した人としての平常のありようという組みおいて照身するもの[35]

でもあると述べている．たしかに死ぬことも出家も決行できなかった作者はこのままではもはや生きてゆくことの不安にたえられないというせっぱつまった狀況から自分を救う道として「日記する」ことが

35) 小谷野純一．「平安後期女流日記の研究」 教育出版センター．1983. P13

選ばれたのである．追いつめられた作者の魂が自分を救うためにとらなけらばならない道として「日記する」ことであった．

「過ぎにし年月頃の事もおぼつかなかりければ」で理解できるように，相當な年月が經った後，思い出としてつづられたと考えられる．歌を主にしながら時時メモしておいたものがあった，それを軸にして體驗したものをつけ加えながら書き記されたに違いないと思われる．文中に「おぼつかな」さで記憶の不正確のために「さてもありぬべき事なむ多かりける」という反省の聲も聞かれるのである．そして長い間にかけて煩惱の深みの中でおのづらに導びかれた生の空虛の意識はその極所において精神の新たな「所」をはげしく求めている．

「かたちとても人にも似ず，心魂もあるにもあらで」したがって「かう物のやうにもあらで思ひつつ，ただ臥し起き明し暮す」狀態は自分が直面している現實をすべて「ことわり」としてあるがままにうけいれられる諦觀の境地に入るのである．

「とにもかくにもつかぬ」狀態の意識は一つの「頼り所」を失おうとしながらも，なお他に「頼り所」を見つける見通しができない狀態の意識である．それは生の空虛の意識であり，時の空虛な深關に壞れてゆく存在の意識でもあった．それはまた，この日記の基調となっている生の「物はかなさ」の意識でもあった．生の空虛の意識にもとづく恐怖から自分を守る道として「物語する」仕方を選んだのであるだが物語は「世に多かる空言だに」と思った．したがって，物語は清新感に缺け，空空しく痛切感に乏しいもので自分の生の打開を求めるものではなかったのである．

作者の切實な意慾は「人にもあらぬ身の上」を「かき日記」することによって清新感を確保し，新しい生の躍進を成しとげられると確信したのである．それは內に向けられた眼が外に向けられ，さらにまた內に向けられたとも言えるのである．この日記は貴族女性の生き方の「ためし」にするつもりで記したものでもあると考えられる．「天が下の人の品たかきやととはんためにもせよかし」と階級的に官廷を中心とした貴族階級を指して，「ためし」たかったのではないかとも考えられるのである．加納氏は作者の中心的な問題にふれて，

> 彼女が兼家妻としていく場面で，幸福感に酔っている．女の恣を觀察することがしばしばある．三流貴族の倫寧家が兼家との結び付きによって「天下の品高き」につながる夢を實現することが望みであった[36]

と言いながらさらに，作者は夢を實現することが望みであった．夢を夢で終らせない自信があった．それを與えたものは歌人としての誇りであった．學問や和歌に秀でた血筋によって知識は豊かであった．中古三十六歌仙に數れらる才能があった．兼家の求婚の中にすでに世に聞えた才媛であることに關心があった．兼家には名の知られる九人の妻妾があった．作者はその中でも身分的には下位の方であったと言われている．

作者に兼家の妻としての第一位にと望ませたのは，「本朝三美人の一」お容姿よりも才能への自信ではなかったかと推測している．

なりゆきは，その望みの通りにはいかなかったことを告白する形で「天下の品高き」に結びついていたことを天下に知らせている．「日記する」目的は，案外こういうものではなかったかとも考えられる．一身を泥にまみれさせる．捨て身の行爲を可能にしたものも見えば作者を絶望にみちびく原因をなした才能であった．作者に恵まれた歌才は彼女を幸わせにしたのであろうかと氏は投げかけている．

讀み續くうちに興味と喜びをそそり，氣持ちを湧き立たせるのは，やはり「物はかなき」の持つ魅力である．清水氏は

> 「物はかなさ」は何らじゃび意味において光明の豫期のはれた，また奪はれようとする不安の心情を表すことばである[37]

と定義しながらさらに，それはいつどこへたどりつくか分らない漂流船の乘員の心情と同じであると言いされに，自己の生の空虛の意義であり，存在壞滅への恐怖の意義であるからである．かげろう日記全

---

36) 加納重文“道綱母”「國文學 解釋と鑑賞」11月號．至文堂．1986．P111
37) 清水文雄“かげろふ日記”「平安日記」三省堂 1978．P171

體にはっている「物はかなさ」は同時に作者の持つ生活感の色調である．彼女はこの「物はかなさ」の重壓から守ることは安易なことではなかった．したがって當時の女性の生活感をもっともよく表わすことばはこの「物はかなさ」である．當時の貴族女流の文藝が，この生活感を地盤としていることを忘れてはならないと氏は注意している．

ただ，作者の場合の「物はかなさ」はすべては終ったという感に強く色彩られたものである．それは存在喪失の恐怖の重荷が加速的にのしかかってくるような「物はかなさ」である．この深刻な「物はかなさ」をのがれるためにもがき，解決に向って開始した方法として菊田氏[38]は次のように整理している．① 愛の完成を期する積極的なもの．② 現實を自己に課せられた運命として享受すること．③ 絶對的他者によって現實から過去する消極的なものなどが考えられる．①②の場合は當時の結婚の様態と執拗に愛情を求める女性の本性がこれを許さなかったのであり，結局③の方法のみ殘されることになる．③の道は神佛への歸依によって宗教的救濟にすがることと，生の完全な否定としての死をえらぶことの二つに分けられるが主題の展開にとって最も重要な契機をなすと思われる宗教世界への近接は，「ものはかなさ」をのがれようとする人間的欲求を滿す過程であると示している．

書名の「かげろふ」からも「ものはかなさ」がうかがわれる．上巻末に「かく年月は積れど思ふやうにもあらぬ身をしにけば，聲あらたまるも喜ぼしからず，ものはかなきお思へば，あるかなきかの心ちするかげろふの日記といふべし[39]」とある．かげろうは自然現象の「陽炎」と昆蟲のトンボの二つの意味が含まれている．「廣辭苑」を引くと「陽炎」は春のうららかな日に野原などにちらちらと立ちのぼる氣，はかないもの，ほのかなもの，あるかなきかに見えるもの，などを形容するのに用いる，その際「かげろう」を意味することもあると説明している．かげろうは(飛ぶさまが陽炎のひらめくように見えるからいう) ① トンボの古名，② かげろう目の昆蟲の總稱．はかないもののたとえに用いるとも説明している．

---

38) 菊田 男“かげろふ日記世界”「平安朝日記」有精堂．1982．P215
39) 川口久雄 校注：前掲書：P170

率直に辭書の通りにとっても共通分母ははかないものになる．昆蟲の場合は壽命とか命のはかなさの象徵になり，自然現象の場合はよく見えなく，あるいは見えたにしても蜃氣樓の如く存在の有無の"なかなさ"の象徵である．從って作者の意識の奥深くには「物はかなさ」がこんこんと流れていたに違いないと考えられる．

ふりかえてみる作者の青春の時，海の霧のように惱みとあこがれにつつまれていたあれこれ幻にうかんで消える想いをよせた男たち，甘美な新婚の思出もつかのまぼろしであった．思いがけない深淵が口をあけ，その中におちこんでもがく自分が見出される．"かげろう"的不安の序曲である．「歎きつつひとりぬる夜」の人に知られた名歌はこうしてできる．はかない抵抗の訴えであったのであろう．

4. 評價をめぐって

池田氏は全卷を讀み終るまでにひしひしと身にせまりくる精神をは何か？と問い，

> 私達の前には現實生活の破綻からあらゆる煩惱に沈める中年の一貴婦人の姿である"

と自からの問いに答えながら戀愛と結婚とを機緣としてまき上る矛盾と葛藤とはこの貞淑 溫良な一女性を驅って愛，憎しみ，嫉妬，執拗，意志とあらゆる「女性」を體驗させ，ついには超人間的な實在の力に賴ろうとする彼女をなおそこに安住することを許さず，いま一度大きな惱みに投げ入れ，その後「母性」なるものを發見させ，そこではじめて「愛」に救われるに至っている．これはただひとり平安朝の一貴婦人としての道綱母の體驗に止まるのではなく，もっと大きな「女性」の永遠の姿でなげればならないとしめしている．

さらに，この日記は單なる古典ではなく，血の上るような切實な人生記錄である．現代には緣のない小話ではなく，當面の問題でもある．

---

40) 池田 鑑 「宮廷女流日記文學」 至文堂. 1981. P36

かげろう日記の悩みは女性の永劫の悩みでなくてはならない．あらゆる女性が，いかなる場合においても無關心で過ごされない大いなるみづからのでもある．道綱母が永劫に誇るべき名譽は單に貞操と才色とに止まらない．藝術的な觀照の深みと魂への眞率な凝視と沈潛と人生への大きな愛とである"と評價している．

伊藤氏[42]は女性がはじめて書き手としての明確な意識をもち，その魂を表白したのが「かげろう日記」であるということに異論のないところであると言いながら，鈴木一雄氏の「女流文學の形成」の中の「かげろう日記の作者は自己の人生の不幸を代償に，作品に生き，そして人間の內面の眞實を追求する新しい女流文學をひらいた」という一句を肯定しながら道綱母の場合は日記という文學樣式によることで，その文學的營みは可能であった．この日記の中心材はあくまでも作者の夫との關係を基にした作者の身の上であるが，日日の天氣，四季の動植物，中にみる山川湖田野のさまなどにも十分關心をもっていたようである．なかでも自然についての敍述がより豊富になるのは記錄の場面であると紀行文的な側面からも評價している．

さらに冒頭の序文についても散見する紀行文を讀むとき，そこには京の邸內ではみられない珍しい自然のさまを傳えようとした作者の意圖もうかがわれる"と述べている．

氏の言う通り，日記の紀行文は作品に關しては，"かげろう"的世界を形成するための題材の一つであった．なんどかの旅は作者が日常生活から脫出できる一つの道であった．しかし脫出できてもそこにまた次の日常性が待ち受けていて作者の悩みをいやしたこともあったが多くはそのもの思いをより深め，「うつし心もなき」さまになってしまうのである．眞實は虛構よりもっと奇なりと人は言う．この日記は人が思うであろう憧れるやかな貴族生活とはほど遠い慘める一人の貴族の妻の本音である．

馬場氏は「麗にして激しい怒りを伴う怒りを伴う正室の嫉妬とはち

41) 池田　鑑：前掲書．P58
42) 伊藤十專："かげろふ日記"「國文學解釋鑑賞」4月號．至文堂．1972．P100
43) 伊藤十專：前掲書：P104

がって，怒りも恨みも屈折を深くしている」と言いながら，もし書くという天倫をもたなかったらこの激しい情のゆくえはどうなっていたのだろうとは誰しも思うことであろうが，ともかくこの作者はその書き殘したことばに證明されて實質的に王朝第一を誇れる嫉妬に生きた女人となってきたのだ"と述べている.

日加田氏は作者は自己は家刀自，北方としての資格を十二分に備えていると自負しながら正式の妻としての見識をしっかり持っていると思いながらも當時の嫉妬しない女性という條件に反して，堂堂と嫉妬の心情を吐いている．また激しい拒否反應を示している．仕立物もつっかえしている．こういう批判の目を開眼させたのも生生しい嫉妬形成を完成させたのも漢文藝の素養によるものであり，史記，漢書などにおける貴婦人の嫉妬形に負うところが多い"と考察している.

伊藤氏は日記文學の花が開くためには紀貫之の大な試みが第一に必要であった．そして道綱母の自らの「身の上をのみする日記」を書くという嚴しい姿勢，散文確立にいたる執拗なまでの創造活動が根本的な要因となると述べながらさらに關根慶氏の「この序文はから察して道綱母の新文學の驚くべき抱負を見ることができる」とのことばを裏づけて道綱母の自己救濟をした必死までの營みによって新しく拓かれた文學は以後の日記文學，物語文學における女流による展開を約束するのである"と評價している.

女が自身の「生」の證を求めて，赤裸裸におのが人生の實相を書いたことが，やがて次次に女流作品を出させる原動力となったのである．女流日記の盛行，それは王朝の美しい，しかしかなしい女の世界の開花であり，花盛りであった．それぞれの花の色や形はさまざまである．和歌に支えながらも散文による實現の探究．日記文體の形成の進展など文體の多様さに展開されていくのである.

特にかげろう日記は日記文學としての文學的機能をもっともよく生かしたものであり，自照文學の先驅をなしていて，作者の半生を苦し

---

44) 馬場あきる "妬みをとおしての人間的自覺" 「國文學解釋と鑑賞」 至文堂. 1980. P76

45) 日加田さくを「内向する世界」 「國文學解釋と鑑賞」 至文堂. 1980. P22

46) 伊藤博 "日記文學開花" 「日本文學史」古代Ⅱ. 至文堂. 1985. P81

めた愛憎，嫉妬，苦悩，悲嘆などをつづった生生しい記録であり，作者の眞實の聲である．そして純粋な自己表現であり，自畫像を浮き彫りにしている．藤岡氏は，

> 人生いかにあわれなるものぞや，思うには遠い，成すには敗れ，悲喜愛樂さまざまの身の人の上はやがてまたわが上なり，これらをかなしと思うにつけて同情の涙はまらず，文事の發達するに從いて筆に上せて世に傳う[47]．

と述べながら自己位置に滿足し，その心をもまた足りたものは異常の才能がなければほとんどそこに安住してなすこともなく，世を送ってしまうものである．もし自分の思うところと違い，うきめが重なる者は勇氣が必要な時は進んでは世と戰い退いては文筆によって述懐するものが望ましいのだが，かげろう日記はまさにこういうものであると言い，「この書は女子の日記の最も古く，また上乘なるものにして」と激讃している．

岡一男氏は天下の子女が當時流行した美男の貴公子を主人公とした浮薄な艶情小説に身をあやまることを恐れて，權門の妻妾生活がいかに苦難にみち，しかもはかないものかをありのままする ことによって教えたものであると述べながらさらにこの日記の最大で最高の價値は兼家のようなわがままで好色な男を夫にしつつ，あくまで精神的に愛し，自分の理想の夫にしようと努め，それができなくだんだん裏目になったとき子の母として自覺を深めてゆき，あらゆる誘惑と自にうちかち決して夫のいやしい性の奴隷にはならなかった．その崇高な精神苦悩の生生しい記録に價値がある．また作者がこういう亂倫な世の中においてこのような輝かしい崇高で純情な精神をもっていたことを日本女性の永遠の典型として讃仰したい[48]と激讃している．

通い婚であった時代だから，待つしか方法はない．男が女の家に通ってくる足が遠のくと男の愛が他へ移りつつあることを鋭敏にかぎつ

---

47) 藤岡作太郎 「國文學史Ⅰ」 平凡社. 1980. P280
48) 岡一男 "かげろふ日記" 「國文學解釋鑑賞」至文堂. 1954. P42

けた作者は男というものの移り氣にある焦立ちを覺えたことであろう．愛の流れに押し流されていく女が瞬間浮び上って自位つよい女に變貌を見せている．自負と見榮をかなぐり捨てて書く勇氣，恥をしのんで「書くことへの良心」，　つまり文學への道をかためたと思われる．愛のうつろいを知り，身のおとろえを覺えはじめると自分本意であった世界から靜かにおのれを突きはなして見る自己變革をなしとげていることに價値があると考えられる．

柿本氏は作者は妻としてさまざまな感情の起伏を經驗した波亂もあった．そうしたものを顧みて，いとおしみ思い立って記していると周知のことを述べながらも次のように言っている作者は日記があったあと二十一年後まで生きるけれども兼家との生活はこれで書き切った書きつごうと思えば書きつぐことができた未完の作品ではない"と考察している．さらに，內容からみて序文にふさわしい文章の調子が濕っていると言いながらその筆がのびて自分の容貌や判斷力をかえりみ靜かにあきらめの生活を送る「現在の心境」に及んでいる．抽象的な言い回しで，分かりやすくはないがこの日記を理解する上に，非常に重要な文章である"と考察している．

氏は別のところで，土佐日記の「女もしてみむとてするなり」というのは男子の日記から脫した性格を持つということであろう．つまり(1)かなであること．そして(2)紀行文として一貫したテーマを具えていること(3)回想錄であること．(4)自己の心情的生活經驗を表白記錄することなどであると提示してさらにかげろう日記は土佐日記をうけついで，登場し，さらに一層「男もすなる日記」から離れる女性らしい和文になりきっている"と言明している．

根本的なことはもはや「男もすなる日記」を意識していない．上の(1)(3)は「土佐日記」の流れをうけつぎ，(2)(4)はこの日記の特性的なものを形成している．かげろう日記は作者の身の上を記したもので土佐日記の貫之の人生經驗は，一生の中で短い期間のひとこまにすぎな

---

49) 柿本奬 "かげろふ日記" 「王朝日記」角川書店. 1977. P107
50) 柿本奬：前掲書：P116
51) 柿本奬 校注 「かげろふ日記」 角川文庫. 1979. P342

いのである．道綱母は二十一年間にわたる人生を物語っている．この相違は相當なへだたりがある．

女の生涯一番大切な期間であるから生の全貌が浮きぼりされている．したがって(2)(4)は土佐日記をはるかにしのいで徹底させていると考えられる．最後見してはならないのは女の一生というもの女の生き方ということについて考えさせるものを含む人生的な意味にまで高められている点にある．

全篇を讀んで，その印象をかみしめていると書かれた細部は次第に影が薄れてゆき，その底からにじみ出てくるのは女の悲しさ人間のあわれさ，はかなさである．土佐日記うけながらもなおさらにそれをのりこえ，確固な文學として地歩を占め，後の女流文學の先驅をなすものとして評價されるのはもっともであると考えられる．

3. 結 論

見て來たように，道綱母は漢文的教養を深く秘めながら漢文學的なものからかなり距離をおいて日記を書いている．土佐日記よりも超えている．そして女性の好む日常口語をもって文學表現語とする傳統を確立し，日本語散文の文學を和歌文學に匹敵する高さに引きあげたのである．

權力の頂上にめがけて突進する兼家，その妻として美貌と多才を謳われる作者，はたから見ればうやまれていい夫婦關係だから同じ受領層の家庭の娘たちから人生や社會の手本を聞かれたのでもあろう．同時代人の道風が手習の手本を爭い求められたように人生の手本は物語などが果すものとしてのであったが，物語のなかには未婚の娘たちの人生の指針とするに足るような眞の愛情に滿ちたものはない．現實の夫婦生活とは美しい夢のような才子佳人の物語のようなものではない．むしろ苦しみしか不安の連續のようなもので，この私の姿を見なさいと作者は自分と自分の愛の體驗を實驗臺の上にのせて物語のもつ機能の限界を示しながら告白し，自照して娘たちに示そうとする賭を試

みている.

資料の取捨擇, 多少の誇張や故意の省略もあったろう. また多少の虛構により, 一種の典型を示そうとする想像的な作者の目もあったのであろう. 日記の記事がはたして事實そのものか, いくらか事實からふくらみやゆがみもあるだろう. 多少の記憶の不確かさとともに, いくらか事實とのずれがあるだろうが, 實際歩いた人生よりももっとも彼女らしい人生となり, いきいきした息吹と輝きにみちた作品になれたのである.

危機と不安の意識, なんども決意し行動しかけた轉生への意義, こうした苦惱のあとに諦めに似たやすらぎの境地に入る. 家庭小說的な安定と均衡感をかもしだしている. このような中庸的な調和的な態度, 廣い意味の敎育的な立場から典型を形づくって示そうとする意識, 作り物語のそらごとと對決して自己の內部のありのままをえぐろうとして創造したジャンルの新じさ.

それらはときに多少の妥協や不明確なもの. 徹底しない中途半端なもの, 矛盾したもの, 變にくどくどしたもの, 主觀の過乘といったものを含まないではないか, それにもかかわらず, それらを超えて, まさに一種の古典的な性格とよんでいい普通的な重厚さ, ある完成された永遠なものをもっている.

作者の生立ち, 作者の生きざま, 序文をめぐってそしてそれを讀んだものたちの評價などを通じて見てきたように, この日記は徹底的に一人の男をよびつづける煩惱の多い女の執念の記錄である. 一人の男の愛に徹底的に傷つきながら, その愛をのりこえ, 愛以上のものを見つけ出そうとした一人の女性, 母性愛を含みながら, それを超えて見せた永遠の女性像を浮彫りにしている. 女性の苦惱のはげしさと人間性の深さに改めて目をみはらされるのである. 抑制した控え目な表現をもちいながら, 不安にゆれつづける女の異常なまでの激情とすさまじいばかりの生命感に貫かれている.

それだけにその古典的な安定感は深い意味を思うと考えられた. この女性的なものを貫こうとする精神, 男を求め絶望する精神は男を求め讚えようとする精神に變って. やがって原氏物語において眞の物語

的な開花をしようとするきざしを見せている．まさにこの点にかげろふの日記の本質と地位があるのを本稿を書き進めるうちに到達した見解である．

また日本の散文學の中で，人生いかに生きるべきだという課題に眞正面から立ち向って體當りした數少ない文學の一つである．この珠玉の作品をおくればせながらも讀めたことは筆者の光榮の一つと思うものである．

参考文獻

松村博司．校注 「大鏡」．岩波書店．1980.

櫻井秀 “日記作者傳(抄)” 「平安日記」
國語國文學研究史大成5．三省堂．1973.

久松潛一 外 6人 「日本文學史」中古．至文堂．1986.

上村悅子 “「かげろふ日記」作者・成立・傳本” 「平安日記」1.
有精堂．1982.

川口久雄 “かげろふ日記” 「日本古典文學大系」岩波書店．1981.

立原正秋 「愛をめぐる人生論」新潮文庫．1992.

室生犀星 「かげろうの日記遺文」 講談社．1992.

田邊聖子 「文車日記」新潮文庫．1993.

木村正中．「かげろふ日記」「日本古典」7．尙學圖書．1980.

小町谷照彦 “かげろう日記” 「國文學解釋と鑑賞」7月號．至文堂．
1986.

小谷野純一．「平安後期女流日記の研究」 教育出版センター．1983.

加納重文 “道綱母” 「國文學解釋と鑑賞」 11月號．至文堂．1986.

淸水文雄 “かげろふ日記” 「平安日記」三省堂．1978.

菊田一男 “かげろふ日記世界” 「平安朝日記」 有精堂．1982.

池田鑑 「宮廷女流日記文學」 至文堂．1981.

伊藤博 “かげろふ日記” 「國文學解釋と鑑賞」 4月號. 至文堂. 1972.
馬場あきら “妬みをとおしての人間的自覺” 「國文學解釋と鑑賞」 至文堂. 1980.
目加田さんを“內向する世界” 「國文學解釋と鑑賞」 至文堂. 1980.
伊藤博 “日記文學開花” 「日本文學史」古代Ⅱ. 至文堂. 1985.
藤岡作太郎 「國文學史Ⅰ」 平凡社. 1980.
岡一男 “かげろふ日記” 「國文學解釋と鑑賞」 至文堂. 1954.
柿本奬 “かげろふ日記” 「王朝日記」 角川書店. 1977.
柿本奬 校注 「かげろふ日記」 角川文庫. 1979.

국문초록

「가게로 일기」의 자조성
-지성적 여성의 사랑과 고뇌-

강 태 국

「かげろう일기」(Kagerō nikki)는 옛 귀족 여성들에게 널리 읽혀진 작품이다.

저자는 "道綱어머니"로 되어있다. 그녀는 대략 서기 937년 - 996년 약 60여년간 일본 平安 시대에 京都에 살았던 여성으로 추측하고 있다.

일기는 상중하 세권으로 쓴 시기는 각각 다르다. 자기 자신을 반성하고 회고하면서, 괴롭고 쓰라린 결혼 생활을 되씹으면서 수모를 당하면서도 참고 견디면서도 그것을 일기로 승화시켜 소아에서 대아로 초월했고, 그 당시 여성의 덧없음을 생생하게 엮고 있다.

이 일기의 영향은 커서, 당시 平安女流文學의 화려한 꽃을 피우게 한 견인차가 되고 있다.

인생 관조의 태도, 자연 묘사, 계절적인 풍물에 대한 묘사, 주위에서 일어나는 자질구레한 일들까지 주관을 통해 소상히 그려놓은 방법 등, 후진 작가들에게 표본이 되고있다.

물론 남성인 紀貫之의 「土佐日記」영향을 제일 먼저 받았으나, 「土佐日記」는 貫之가 인생경험을 썼지만 일생 중 한 기간의 짧은 한 토막을 기록한 것에 불과하다.

「かげろう日記」는 저자가 21년간에 걸친 삶을 이야기하고 있다. 그것도 여성의 일생 중 가장 소중한 20 ~ 30대에 겪었던 사랑과 갈등 그리고 초월의 이야기다. 이런 점이 선행하는 「土佐日記」와 다른 점이라고 본다.

필자는 일본 고전문학에 흥미를 느껴 平安日記文學을 택했다. 처음으로 접한 것은 「更級日記」였다. 연구하던 중, 선행하는 일기가 마음에 걸려 원점으로 다시 시작하여 「土佐日記」와 몇년간 씨름했다.

어느 정도 파악하게 되자, 자연히 「土佐日記」의 영향을 이어받은 본 「かげろう日記」를 읽기로 했다.

본 일기는 처음이고 해서 욕심을 내지 않고 차곡차곡 파고 들 심사로 임했다. 우선 작가의 내력을 문헌 상으로 살펴 보고, 다음으로는 그녀의 삶과 고뇌, 사랑과 미움 등을 그려내 보려고 노력했다. 더욱이 서술함에 있어서는 딱딱한 논문 형식이 아니고, 읽는 즐거움마저 감돌도록 노력해 보았다.

그리고 작가가 집필한 동기는 일기 상권에 있는 서문에 서려있다고 본다. 서문에 초점을 맞추어 고찰해 보았다. 최후로는 일본 국학자들은 이 일기를 어떻게 보고, 또 어떻게 평가하고 있는 가를 알아보았다.

그러나 끝내고 보니, 아직도 먼 감이 들어 이제부터로구나 하고 생각하며, 계속 파고 들어갈 다짐을 해보았다.